第六講　内容説明

一

問1　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

近頃、和歌の道、ことにもてなされしかば、内裏、仙洞、摂政家、いづれもとりどりに、そこをきはめさせ給へり。臣下あまた聞こえし中に、治部卿定家、宮内卿家隆とて、家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、…

注　内裏、仙洞、摂政家…順徳天皇を中心とする内裏歌壇、後鳥羽院を中心とする仙洞歌壇、藤原道家を中心とする摂政九条家歌壇のこと。

問　傍線部「いづれもとりどりに、そこをきはめさせ給へり」とはどのような状況を表しているか。次の中から最もふさわしいものを選べ。

ア　身分の高い人から低い人まで、皆が和歌に熱中していた。
イ　都だけでなく地方でも、皆が和歌を楽しんでいた。
ウ　皇族も貴族も、様々な歌を詠まなくてはならなかった。
エ　それぞれの流派が対抗し、和歌のできばえを競っていた。
オ　皇族も貴族も、皆が和歌をきわめ、盛んに詠んでいた。

問２　次の文章は、幕臣磯野政武（いそのまさたけ）の江戸の別荘（松楓亭（しょうふうてい））に政武と同門の歌人たちが集まった日の午後の出来事を、参加者の一人近藤保好（こんどうやすよし）が記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。　※本文中略有り。

時は未（ひつじ）の半（なか）ばにやなりぬらむ。

保好

のどかなる日影に冬を忘れ花時も小春の名にや咲くらむ

「さらば紅葉のもとに、酌（く）み残せし竹の葉の露の名残をこの花の陰にも」と、また盃（さかづき）の数を重ねたれば、いたく酔（ゑ）ひに酔ひぬ。我は酔ひのあまりに眠（ねぶ）りをもよほし、夢の枕も、ありし所のかはるとはなくて、露結ぶ山吹はえもいはぬ色に咲きて、夕ばへの盛りを見せ、梢（こずゑ）の藤の紫に、暮れゆく春の名残をとどめ、小田の蛙（かはづ）の折知り顔に声たつるなど、すべていひもてゆかむに、くだくだしかるべきほどの弥生の暮（くれ）の夕げしきなり。あはれ、かかる折にこそは花鳥の色にも音にも情け知るばかりの言の葉もがなと、せばき袖をかきあはせ、杉の柱に寄りゐて、いといたう案じほれたるに、そことなき鐘の響きて酔ひの眠りをおどろかすめり。

問　傍線部「いといたう案じほれたる」とあるが、その説明として最も適当なものを一つ選べ。

ア　筆者は遅れてやって来たことを後悔して、どうしたらよいか考えている。

イ　筆者は酒に酔って、思案しようとしても何も考えられないでいる。

ウ　筆者は杉の柱にもたれかかって、立ち去った人々を心配している。

エ　筆者はすばらしい花の色や鳥の声を和歌に詠もうと苦心している。

問3　次の文章は、九条殿藤原師輔について述べたものである。読んで後の問に答えよ。

いにしへより今にかぎりもなくおはします殿の、ただ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心憂く口惜しきことにてはおはしますといへば、侍、されど、ことの例には、まづその御時をこそは引かるめれといへば、それは、いかでかはさらでは侍らん。そのみかどのいでおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。さらざらましかば、このごろわづかにわれらも[A]諸大夫ばかりになり出でて、所々の御前、雑役につられ歩きなましとこそ、入道殿は仰せられければ、源民部卿は、さる形したるまうちぎみだちのさぶらはましかば、いかに見苦しからましとぞ、笑ひ申させ給ふなる。〈中略〉

御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会（だいじょうえ）の御禊（ごけい）にこそ、いとうるはしくてわたらせたまひにしか。それは、人の目にあらはれて、九条殿なむ御うしろを抱きたてまつりて、御輿（みこし）のうちにさぶらはせたまひけるとぞ、人申しし。げに[B]うつつにてもいとただ人とは見えさせたまはざりしかば、ましておはしまさぬあとには、さやうに御まぼりにても添ひ申させ給ひつらん。

[C]さらば、元方卿、桓算供奉をぞ、逐（お）ひのけさせたまふべきな。…

（大鏡）

冷泉院…冷泉天皇。第六三代天皇。九五〇～一〇一一。在位は九六七～九六九。母は師輔女安子。
諸大夫…摂関・大臣家の家司（けいし）を務める四位五位を極位とする家柄の者。「まうちぎみ」も同意。
入道殿…藤原道長。九六六～一〇二八。父は師輔男兼家。
源民部卿…源俊賢。九六〇～一〇二七。母は師輔女。
大嘗会の御禊…天皇即位後初の新嘗祭に先立って行われる潔斎。
九条殿…藤原師輔。九〇九～九六〇。
元方卿…藤原元方。八八八～九五三。死後怨霊化したという。
桓算供奉…比叡山の僧。生没年未詳。死後怨霊化したという。

問一 傍線部A「諸大夫ばかりになり出でて」とあるが、どのようなことをいうのか、次の中から最も適切なものを選べ。

ア 零落　イ 出世　ウ 繁忙　エ 堕落

問二 傍線部B「うつつにても」とあるが、どういうことか。次の中から最も適切なものを選べ。

ア 夢心地の状態であっても。
イ 夢から覚めた正気の状態でも。
ウ 生前でも。
エ 物語に虚構されない現実においても。

問三 傍線部C「さらば」とあるが、どうであるならばというのか。次の中から最も適切なものを選べ。

ア 九条殿自身が実は強力な物の怪であるのならば。
イ 九条殿が物の怪を退治する能力があるのならば。
ウ 九条殿に物の怪を退治する能力がないのならば。
エ 九条殿に物の怪に憑（つ）かれた経験があるのならば。

二

問1　次の文章は、本居宣長の創作『手枕』の一節で、帝（内）が、春宮（故宮・前坊）を亡くした御息所を見舞うよう源氏の君に促すところから始まる。これを読んで、後の問に答えよ。

内にも、故宮の御事を忘れさせ給はず、あはれにおぼしめし出でつつ、折々の御とぶらひ、たえずぞありける。源氏の君にも、「前坊の御息所（みやすどころ）のあはれにながめ給ふらむを、折々はとぶらひものせよかし」など、のたまひつけしかば、げに心にくくよしある人と、さきざきも聞きおき給ひしあたりの事なれば、かつはゆかしくおぼされて、ひと日、内裏（うち）よりまかで給ふとて、ゆふつけておはしけり。

問　傍線部について、源氏の君が御息所を見舞おうと思い立ったのはどのような事情によるか、簡潔に説明しなさい。

問２　次の文章は、内大臣の通いが途絶えたことに悩む伏見の大君が、叔母から気晴らしにと宮中に誘われて参内したところ、帝に見初められ寵愛を受けた後に、帝の文（ふみ）を受け取る場面から始まっている。これを読んで、後の問に答えよ。

御消息ばかり、いとしげう、あはれにこまやかに書き尽くさせ給へるも、まことにかたじけなう思ひ知られつつ、…〈中略〉
常よりも、風さへ心細き夜、御袖の氷もいと溶けがたう、明かしかねさせ給ひて、まだ明け暗（ぐれ）のほどに、内裏（うち）より、

「片敷きの冴ゆる霜夜の衣手にかかる涙の色を見せばや
寂しき床（とこ）は変はらずと、Ⅰあらぬ思ひや立ち添ふらん」

とあるを、待ち見給ふ心地も、いとあはれにて、うち泣かれ給ひぬ。

「霜払ひ跡ふみ作る浜千鳥見ても Ⅱかなしき思ひならでは
何ごとをかは」

と、聞こえ給へるを、たぐひも知らず、かなしう思されて、いよいよ流し添へさせ給ひけり。

注　あらぬ思ひ…私ではない他の人への思い。
思ひならでは…思い以外には。
何ごとをかは…「何ごとをかは思はむ」を省略した形。

問　波線部Ⅰ「あらぬ思ひや立ち添ふらん」、Ⅱ「かなしき思ひならでは　何ごとをかは」は、問いかけとそれに対する答えになっている。誰のどのような問いかけに対して、誰がどのように答えたのか、内容を補って七十字以内で説明せよ。

問3　次の文は、実母に先立たれた姫君が継母に疎まれ、姉妹たちの世話をさせられるなど、つらい日々を送っていた頃の様子を述べたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

君ひとり臥（ふ）し、寝（い）も寝（ね）られぬままに、「母君、我を迎へたまへ」と、「わびし」と言ひつつ、…〈中略〉

つとめて、物語してのついでに、「*これがかく申すは、いかがし侍らむ。かくてのみは、いかがは、し果てさせたまはむ」と言ふに、いらへもせず。わづらひてゐたるほどに、「*三の君の*御手水（てうづ）参れ」とて召さるれば、立ちぬ。心のうちには、と｜ありともかかりとも、よきことはありなむや、｜女親（めおや）のおはせぬに、幸ひなき身と知りて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿の内離るまじければ、ただ消え失せなむわざもがなと思ほす。

（『落窪物語』より）

注　これがかく申すは＝姫君に仕える侍女あこきの言葉。「これ」はあこきの恋人である帯刀（たちはき）のこと。「かく申す」は、帯刀の主人である少将が姫君と結婚したがっていることを、あこきに伝えたことを指す。

三の君＝継母の実の娘で、姫君の姉妹にあたる。

御手水参れ＝手を洗う水を差し上げなさい。

問　傍線部はどういうことを言っているのか、説明せよ。

【第六講】

〔模範解答〕

一

問1　オ

問2　エ

問3　問一　ア

問二　ウ

問三　イ

二

問1　以前から、御息所は奥ゆかしく風情がある人だと源氏の君は聞いていたので、どんな人か心がひかれたという事情。

問2　帝の、大君が自分の他に誰かを思っているのではないかという問いかけに対して、大君が、帝を愛しく思う気持ち以外に何の思いもないと答えた。（六六字）

問3　少将と結婚しようが、このままでいようが、実母が死んだ自分にはこの先良いことはないだろうということ。

〈現代語訳〉

一

問1 近頃、和歌の道は、特にもてはやされたので、順徳天皇を中心とする内裏歌壇、後鳥羽院を中心とする仙洞歌壇、藤原道家を中心とする摂政九条家歌壇など、皇族も貴族も皆が、和歌をきわめなさっていた。臣下がたくさん知られていた中に、治部卿定家、宮内卿家隆といって、家の名が絶えることなく、和歌の道に名声を得た人々であったので、…

問2 時刻は午後二時頃になったであろうか。

保好

のどかなる…＝のどかな日差しに冬を忘れて咲く花も、時節も小春の名前だから咲いているのだろうか。

「そうならば紅葉のもとで、酌み残した竹の葉の露〔＝酒〕の名残をこの桜の花の陰でも（飲もう）」と、また盃の数を重ねたので、ひどく酔ってしまった。私は酔いのせいで眠気を催し、夢に見たのは、今いる所と変わらず、露が発生している山吹の花は言葉にできないほど素晴らしい色に咲いて、夕方の光に輝く花盛りを見せ、梢の藤の紫色に、暮れていく春の名残を留め、田の蛙が季節を知っている顔で鳴くなど、すべて言おうとすると、くどくなるだろうくらいの三月の暮れの夕景色である。ああ、このようなときに花の色や鳥の声にも風情を表すほどの和歌が詠みたいと、狭い袖をあわせ〔＝ない才能をどうにか絞って〕、杉の柱にもたれかかり、たいそうひどく苦心していると、どこというわけもなく鐘の音が響いて酔いの眠りを覚ましてしまったようだ。

問3 「昔から今に至るまで素晴らしくいらっしゃる殿〔＝九条殿藤原師輔〕が、ただ（師輔の孫である）冷泉院の（気の病の）ご様子だけが、たいそう情けなく残念なことでいらっしゃる」と（大宅世継が）言うので、侍が、「しかし、何かの例としては、まずその冷泉院の御代を引かれるようだ」と言うと、（世継は）「それは、どうしてそうならないことがありましょう。その帝〔＝冷泉院〕が即位なさったから、この藤原氏の一門が、今に栄えていらっしゃる。『そうでなかったら〔＝冷泉天皇が即位なさらなかったら〕、このごろやっとのことで自分たちも諸大夫くらいになって、あちらこちらの御前駆、雑役として連れられ歩いていただろう』と、藤原道長がおっしゃったので、源俊賢は、『そのような（上品な）容貌をした諸大夫がお仕えしていたならば、どんなに見苦しいだろうか』と、笑い申し上げなさったそうだ。〈中略〉

（冷泉院には）御物の怪がひどく憑りついて、どうであろうかと（周囲にいらっしゃる人々が）お思いになっていたが、大嘗会の御禊で、たいそうきちんとしてお出ましになった。『それは、人の目に見えて、九条殿が（冷泉院）を後ろから抱き申し上げて、御輿の中にお控えなさっていた（からだ）』と、人が申し上げた。本当に（九条殿は）生前にもたいそう常人とは見えなさらなかったので、まして亡くなりなさった後には、そのように（冷泉院の）御守護霊として添い申し上げなさっていたのだろう。

（侍が）「そうならば〔＝九条殿が物の怪を退治する能力があるのならば〕、藤原元方や、桓算供奉の怨霊を、（九条殿が）払いのけなさるに違いないだろうな。…」

二

問1　天皇におかれましても、故宮のことを忘れなさらず、しみじみと思い出しなさっては、折々のお見舞いが、絶えずあった。源氏の君にも、「前坊の御息所が悲しく物思いにふけりなさっているだろうから、折々はお見舞いに行きなさいよ」など、言いつけなさったので、（御息所は）本当に奥ゆかしく風情がある人だと、以前も（源氏の君は）聞きなさっていたことなので、（気が重いが）一方では心がひかれると思いなさって、ある日、宮中から退出なさるといって、夕方に（御息所のところへ）いらっしゃった。

問2　お手紙ばかり、たいそう頻繁に、しみじみと細かく書き尽くしなさっているのも、本当にもったいなく思い知られては、…〈中略〉

いつもよりも、風までもが心細い夜、（帝の）御袖の氷も溶けにくく〔＝涙をひどく流しながら〕、夜を明かしかねなさって、まだ明け方の暗いときに、宮中〔＝帝〕から、

「片敷きの…＝一人寝の霜が冴える夜の袖にかかる涙の色を見せたい

寂しい（一人寝の）床は変わらない（私の状態）と、私ではない他の人への思いが（あなたには）湧いていないだろうか」

とあるのを、（大君が）待ち見なさる気持ちも、たいそうしみじみとして、つい泣きなさった。

「霜払ひ…＝霜を払って足で踏んで足跡をつける浜千鳥のような筆跡を見ても、愛しい思い以外には
　他にどんなことを思うだろうか、いや、思わない」
と、申し上げなさるのを、（帝は）たとえようもなく、愛しくお思いになり、ますます涙を流し添えなさった。

問3
姫君が一人で横になり、寝られないままに、「母君、私をお迎えなさいませ〔＝あの世に連れて行ってください〕」と、「つらい」と言いながら、…〈中略〉

翌朝、話をしているときに、（侍女のあこきが）「私の恋人の帯刀が帯刀の主人である少将が姫君と結婚したがっていると私に伝えてきたことを、どのようにしましょうか。こうしてばかりでは、どうして、一生を過ごせなさるだろうか」と言うと、（姫君は）返事もしない。困っているところに、「三の君の手を洗う水を差し上げなさい」と呼ばれるので、立った。心の中では、どうあろうが〔＝少将と結婚しようが、このままでいようが〕この先良いことがあるだろうか、いや、ないだろう、母上が亡くなったので、不幸なこの身と知って、なんとかして死にたいと思う気持ちが強い。尼になっても、この屋敷を離れることができないので、ただ死ぬ方法があればなあとお思いになる。